



ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



明石の大ダコ
三郎左衛門の知恵



沼島女郎
島から妃が流した絵

伝説

明石の大ダコ
三郎左衛門の知恵
沼島女郎
島から妃が流した絵

紀行

海からやってくるもの
・明石の蛸
・沼島を訪ねる

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

明石の大ダコ 三郎左衛門の知恵

むかしむかし、明石（あかし）の西、林崎（はやしざき）の岸崎（きさき）というところに、西窓后（せいそうこう）・東窓后（とうそうこう）という二人のお后（きさき）が住んでいました。

そのころ明石の海には、足の長さが八キロメートルから十二キロメートルもあるという、とてつもなく大きなタコが住みついていました。この大ダコは、美しいお后たちに目をつけ、何とかして海に引っぱりこんでしまおうと、岸崎近くの海辺をうろつくようになりました。お后たちは、とてもおそろしくて、毎日じっと家の中に閉じこもるようになってしまいました。

近くの二見浦（ふたみがうら）に、浮須三郎左衛門（うきすさぶろうざえもん）という強い武士がいました。三郎左衛門は、この話を聞いて、「にくい大ダコめ。おれが退治してやる。」と決意しました。しかし、相手はおそろしく大きなタコ、太い足をふりまわされてはとてもかないそうもありません。何か作戦をたてなくてはいけないと、三郎左衛門は知恵（ちえ）をしぼりました。

そうして思いついたのが、タコツボでした。タコは、ふだんはタイなどの天敵から身を守るために、岩場のすき間にもぐりこんで生活しているので、壺（つぼ）のような狭いところを見つけるとそこに入ってじっとしてしまいう性質があります。これを利用したのが、現在も行われているタコツボ漁なのです。三郎左衛門は、大ダコ用に特別大きな壺を作って、海にしかけました。

ねらいは見事にあって、大ダコはこのタコツボでのんびりしているところを陸に引き上げられ、生けどられてしまいました。でも、それからが大変でした。大ダコは必死で足をのばして壺からはい出ようともがきました。三郎左衛門は、暴れまわる大ダコの足を、一本一本刀で切り落としていきました。大ダコはますます暴れて、とうとうタコツボをひっくり返してしまいました。

大ダコは、タコツボをひっくり返すと、すばやく山伏（やまぶし）の姿に身を変え、ものすごい早さで北へと逃げだしました。逃がしてなるものかと三郎左衛門も必死で追いかけます。ついに林崎の林神社のあたりで追いつめ、山伏をみごと四つにたたき切りました。

切られた大ダコは、そのまま大きな石になってしまいました。都の天皇はたいそうよろこんで、三郎左衛門にたくさんのほうびと、「源時正（みなもとのときまさ）」という名前を与えたということです。

（『郷土の民話』東播編をもとに作成）

伝説

沼島女郎 島から妃が流した絵

今から700年近く前、後醍醐天皇（ごだいごてんのう）が鎌倉幕府（かまくらばくふ）をたおそうと、戦いをはじめていたころの話です。西風が吹きつけるある朝、淡路島（あわじしま）の南にうかぶ沼島（ぬしま）の水の浦（みずのうら）の浜辺に、小舟が流れつきました。漁師たちが船の中を見ると、十二単（じゅうにひとえ）を身にまとった、見たこともないような美しい女性が倒れていました。

漁師たちはおどろいてみなで助けおこしました。女性は、ぼつりぼつりと自分の身の上を語りはじめました。

「私は都の後醍醐天皇の皇子（おうじ）である尊良親王（たかよししんのう）の妃（きさき）です。いくさがあって、尊良親王が土佐国（とさのくに＝現在の高知県）に移される罰（ばつ）を受けましたので、私も後を追って土佐に行くところでした。」

土佐に移された尊良親王は、しばらくしてから家来の秦武文（はたのたけぶん）を送って、都に残してきた妃を呼んだのです。妃はいとしい夫に会う日を楽しみに、大物浦（だいもつうら＝現在の尼崎市）から土佐へと向けて船出することにしました。

ところが、妃が乗ろうとした船は、海賊船だったのです。海賊船の首領は、妃に付きそっていた武文を言葉たくみにだまし、陸に置きざりにして船を出しました。だまされたことに気づいた武文は、小舟に乗って必死で追いかけてましたが、とても追いつけず、ついに海に身を投げ自殺してしまいました。

しかし、海賊船が鳴門（なると）の海峡（かいきょう）に近づくと、にわかにかきくもり、海には大うずがおこって、横なぐりの雷雨（らいう）が吹きすさぶと、船は木の葉のように波にもまれはじめました。そして、荒れくるう海の中に、武文の亡霊（ぼうれい）があらわれたのです。

首領は、「これは海の神のいかりだ。これをしずめるには妃を海に放すしかない。」と考えました。妃は小舟に移され、荒れくるう海に放されました。妃はいつしか気を失ってしまいました。

妃は島の人たちの手厚いもてなしのおかげで、すぐに元気をとりもどしました。しかし、それにつけても思い出されるのは土佐にいる夫のこと。でも、大切にもてなしてくれる島の人々の気持ちを思うと、なかなか土佐に行きたいとは言い出せませんでした。

伝説

沼島女郎 島から妃が流した絵

やがて戦いは収まり、後醍醐天皇が都で新しい政治を始めることになり、土佐の尊良親王も都に帰ることができました。八方手をつくして妃が沼島にいることを知った親王は、すぐに妃をむかえる使者を送りました。

夫との再会を待ちわびる妃はすぐにでも都に帰ろうとしました。ところが、船を出そうとすると、またいつかのように海が荒れ、大風が吹きすさびはじめました。妃をしたう島の人々は口々に、「これは海神のおいかりじゃ。お妃様はやはり島にいてください。」と頼みました。

それでも妃の都に帰る決心はかたく、ふところから紙を取り出すと、自分とは似ても似つかないみにくい女性をえがき、「わたくしの姿はこのようなものですよ。」と海に流しました。すると、大風はぴたりと収まり、もとの静かな海に戻りました。

島の人々は、涙ながらに妃を見送りました。それからというもの、沼島の人々は近くの海でとれるオコゼによく似た魚のことを、「沼島女郎（ぬしまじょろう）」と呼ぶようになったのです。

(『郷土の民話』淡路編、『兵庫の伝説』第一集をもとに作成)

紀行 海からやってくるもの

明石の蛸

明石（あかし）のタコは名産として全国的に有名だが、やはり、明石には大ダコの話が伝わっている。明石市街地の西にある林神社付近がその舞台とされてきた。林神社の西側には現在貴崎（きさき）という地名があるが、ここが二人のお后が住んでいたという岸崎（きさき）にあたるという。また、林神社の東側の町名を立石（たていし）といい、ここの山裾に、大ダコが石になったという場所があって、「立石」と呼ばれている。ただし、現在は石そのものは見あらず、「立石」の下からいつしかわき出ようになった清水の跡とされる古井戸が残されている。また、この大ダコ退治の話は、タコツボ漁の起源の話としても語られてきた。



大ダコ
（『北斎漫画』）

ただし、この話、江戸時代中ごろの地誌『播磨鑑（はりまかがみ）』では、大ダコではなく、大エイを退治する話として載せられている。『播磨鑑』の誤記の可能性もあるが、あるいは明石のタコが名産として有名になるにつれて、主役がエイからタコに交代したのかもしれない。エイの伝説は、「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「えいがしま エイと一緒に祈りをする」で紹介したように、明石の西にある江井ヶ島（えいがしま）の由来伝説としても語られている。この地域にとって、古い段階での神聖な魚はタコではなくエイであったのであろうか。



林神社



立石の井



タコに限らず、明石の伝説にはやはり海にかかわるものが多い。紀行文「長寿伝説」で紹介した人魚伝説もその一つである。また、明石という地名も、林崎の西、松江の沖合の海中に赤い岩があったところからついたとされている。松江海岸には由来を記した立て札とともに、鹿の絵が彫られた赤い岩が置かれている。近年の調査で、実際に沖合の海中に赤い石があることが確認されているという。この赤石の由来については、これも「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「夢野 夢占いの結末は・・・」で夢野の鹿の話として紹介している。淡路へ渡ろうとして獵師に射殺された牡鹿（おじか）の血が固まったので赤いという話である。



タコツボ
（林崎漁港にて）



現在の
林崎・松江漁港

ただしこの話、「ひょうご伝説紀行 神と仏」の「神の坐す山と神出の里」で取り上げた神戸市西区神出(かんで)の最明寺(さいみょうじ)の縁起では、雄岡山(おっこさん)の男神が、小豆島(しょうどしま=現在の香川県小豆島町)の女性に恋をして、鹿の背に乗って海を渡ろうとしたが猟師に鹿が射殺された、という話としても伝えられている。人々の興味を引く話は、さまざまなバリエーションを生み出しながら広まっていくものなのだろう。伝説は、その時代の人々の関心や、語られる場所、目的によって、少しずつ変わっていく。



林崎の海



松江海岸の赤石



松江の海

沼島を訪ねる

「ひょうご伝説紀行 神と仏」の「古事記とオノコ口島伝説をめぐる」でも紹介した、淡路島の南に浮かぶ沼島(ぬしま)。沼島女郎(ぬしまじょうろ)の話は、この島に伝わった話である。沼島はかつて武島(むしま)とも呼ばれた。そのため、この話の題名も本来は「武島女郎(むしまじょうろ)」ともされていた。



淡路島から見た沼島



沼島の港

沼島の港がある入り江から、西に一つ離れた浜辺がある。現在は埋め立てが進んでかつての面影は失われているというが、ここは「水の浦」と呼ばれ、お妃が流れついたところと伝えられている。現在は削られて失われているが、この水の浦と港との境界にあった大岩を「王岩(おういわ)」と呼んでいたという。この「王岩」から港側へ少し歩いたところに、お妃が濡れた衣を乾かしたという「衣掛け岩(きぬかけいわ)」がある。さらに「衣掛け岩」から少し東には、お妃が腰を掛けたという「腰掛け岩(こしかけいわ)」がある。現在、岩の両側に二つの祠(ほこら)がまつられている。



水の浦



王岩跡(かつてはカーブミラーがある擁壁の前まで岩が突き出していたという)



衣掛け岩



腰掛け岩

また、お妃は、島内の「王寺（おうでら）」と呼ばれるところに住んだとされている。現在、「王寺」と呼ぶ一帯の中には、鎌倉幕府成立期の武将である梶原景時（かじわらかげとき）の墓と伝えられる五輪塔（ごりんとう）がある。南北朝時代以降、沼島には梶原姓を名乗る水軍が拠点を置いていた。梶原景時の墓とするのもそこからきた伝承であろう。ただし、五輪塔自体は鎌倉時代中ごろ以前の古い様式で、兵庫県内では最古級である。

また、五輪塔の少し南方には、「沼島庭園」と呼ばれる庭園もある。かつては、戦国時代の戦乱の中で都を離れ、この島に流れてきた室町幕府10代將軍足利義植（あしかがよしね）の館にともなうものともされてきたが、近年ではそれよりやや新しい江戸時代前半のものとも見られている。庭園の下には、「八角井戸」と呼ぶ井戸もあり、漂着したお妃を手当てするための水が汲まれた井戸と伝えられている。また、この「王寺」からやや東へ行った山裾には、「王流院（おうりゅういん）」との山号を持つ西光寺（さいこうじ）があり、お妃の屋敷跡に由来するお寺と伝えている。

さて、沼島女郎の話は、南北朝時代に入る直前、元弘の変（げんこうのへん）の時期に設定された話である。元弘の変とは、後醍醐天皇（ごだいごてんのう）が鎌倉幕府を倒そうと画策した事件で、この時は後醍醐が敗れて隠岐国（おきのくに＝現在の島根県隠岐諸島）に流罪となる。この伝説の骨組みとなる部分は、南北朝の内乱を描いた軍記物語『太平記（たいへいき）』巻第18に、「一宮御息所事（いちのみやみやすどころのこと）」としてすでに記述されている。

しかし、『太平記』に記されているからといって、必ずしも事実とは限らない。事実としては、尊良親王（たかよししんのう）が土佐国（とさのくに＝現在の高知県）に流された時点で、この話のお妃に相当する女性（今出川公顕娘＝いまでがわきんあきのむすめ）はすでに亡くなっていたとされており、やはりこの話自体は虚構のようである。この話は、『平家物語』の中のエピソードをもとに創作されたものと考えられている。

しかし、こうした話が生み出される背景には、沼島が当時本州と四国方面を結ぶ海上交通の要地で、風待ち、潮待ちの港として、古くから数多くの船や人々が行き交う島だったことがある。南北朝時代から戦国時代にかけては、先に触れた梶原氏のほかに、安宅（あたぎ、「あたか」とも言う）氏などの有力な水軍が沼島に拠点を置いており、淡路・紀伊・阿波の紀淡海峡周辺に勢力を広げていた。



伝梶原景時五輪塔



八角井戸

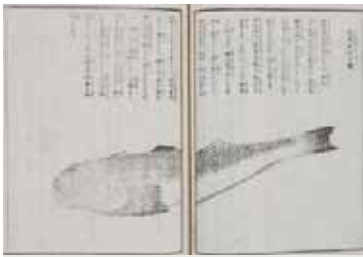


西光寺

京都を中心に活動していた『太平記』執筆者も、こうした沼島に関する知識をもとに、都と土佐を結ぶ航路上の舞台として沼島を選び、この話を作り出したのであろう。『太平記』は、琵琶法師（びわほうし）が語る『平家物語』と同様に、「太平記読み」と呼ばれる遍歴の芸能者によって全国的に語り伝えられてきた。いつの時点かは定かではないが、こうした人々の活動によって、沼島でもこの話が語り継がれるようになっていったのではないだろうか。



沼島八幡神社から見た淡路島



沼島女郎(『淡路国名所図絵』)

そして、こうした話が現地に定着していく上でも、沼島が海上交通の拠点であったことが大きな役割を果たしたのだろう。「海から、いままで見たことのないような高貴な人がやってきたときの驚きが、この伝説の根っこになっているのではないか。」島を案内してくださった神宮寺（じんぐうじ）住職の中川宜昭師はそうおっしゃっていた。海上交通の要衝であった沼島には、時折、普段は会うこともないような高貴な人がやってくるのが実際にあったのではないか。そうした時に島の人々が抱いた印象の記憶が、やがてこの話を自分たちの地域の伝説として受け止めさせ、さらに魚の由来をも付け加えて語り継がせるようになっていったのだろう。

この伝説は、中央の世界で作り上げられた伝説が、地域の中でも受け入れられ、地域に合わせたアレンジを加えながら語り継がれてきた例といえる。紀行文「犬と人」で紹介した猿神退治などの忠犬物語や、紀行文「岩と樹木」で紹介した「おりゅう柳」伝説と同様である。

用語解説

【『播磨鑑』】はりまかがみ

宝暦12（1762）年ごろに成立した播磨の地理書。著者は、播磨国印南郡平津村（はりまのくにいなみぐんひらつむら＝現在の加古川市米田町平津）の医者であった平野庸脩（ひらのつねなが、ひらのようしゅう）。享保4（1719）年ごろから執筆が始められ、一旦完成して姫路藩に提出した宝暦12年以降にも補訂作業が進められた。著者の40年以上にわたる長期の調査・執筆活動の成果である。活字化されたものは、播磨史籍刊行会校訂『地志 播磨鑑』（播磨史籍刊行会、1958年）がある。

【梶原景時】かじわらかげとき

? 1200。相模国（さがみのくに＝現在の神奈川県）の武士。治承4（1180）年の源頼朝（みなもとのよりとも）挙兵のとき、平家方として戦ったが、石橋山の合戦後、洞窟に隠れていた頼朝を見逃し、後に頼朝に重用されるようになったとされる。

頼朝が弟の範頼（のりより）、義経（よしつね）を派遣して源義仲（みなもとのよしなか）や平家との戦いを進めると、軍勢の一員として派遣された。元暦2（1185）年、四国へ向けて渡海しようとした時に義経と論争を起こしたとされ、また平家滅亡後、義経を頼朝に讒言（ざんげん）し、その結果頼朝と義経の中が断絶したとされるなど、義経との不和が語られてきた。ただしその一方で、一の谷の合戦では子息の景季（かげすえ）を救うために、再度敵中へ突撃したなどの美談も語られている。

頼朝が没した直後の正治元（1199）年、新将軍頼家（よりいえ）に、結城朝光（ゆうきともみつ）が謀反を企てていると讒言したが、逆に有力御家人66人連名の弾劾文を出され失脚した。翌年1月、謀反を企てて京都に向かったが、駿河国で現地の武士に阻まれ、討ち死にした。

【五輪塔】ごりんとう

供養塔、墓塔として造られることが多かった仏塔の一種。石製のものが多く残る。下から順に、基礎にあたる方形の地輪（ちりん）、円形の水輪（すいりん）、笠形の火輪（かりん）、半球形の風輪（ふうりん）、宝珠形（ほうしゅがた）の空輪（くうりん）の五段に積み、古代インドで宇宙の構成要素と考えられていた、地、水、火、風、空（五大、ごだい）をあらわす。密教の影響が強く、石塔としては平安時代末期からの遺品が知られている。

用語解説

【足利義植】あしかがよしたね

1466 1523。室町幕府10代将軍。初めの名は義材（よしき）、ついで明応7（1498）年に義尹（よしただ）、さらに永正10（1513）年に義植（よしたね）と改名した。延徳2（1490）年に将軍となり、近江国（おうみのくに＝現在の滋賀県）の六角（ろっかく）氏、河内国（かわちのくに＝現在の大阪府東部）の畠山（はたけやま）氏の討伐を進めたが、明応2（1493）年、管領（かんれい）細川政元（ほそかわまさもと）のクーデターによって将軍職を失った。

その後越中国（えっちゅうのくに＝現在の富山県）に移って畠山氏を頼って京都奪回を目指すが失敗。ついで周防国山口（すおうのくにやまぐち＝現在の山口県山口市）の大内義興（おおうちよしおき）を頼り、細川氏の分裂に乗じて永正5（1508）年に大内義興・細川高国（ほそかわたかくに）とともに京都に復帰し将軍職に返り咲いた。

しかし、自らを擁立した細川高国、大内義興の専横に不満を持ち、永正10年に京都を出奔して近江国甲賀（こうか＝現在の滋賀県甲賀市）に移る。この時は大内義興の譲歩により帰京するが、大永元（1521）年に再び細川高国と不和となり淡路国に出奔、将軍職を失った。その後阿波国（あわのくに＝現在の徳島県）へ移り、大永3（1523）年に没した。

【後醍醐天皇】ごだいごてんのう

1288 1339。文保2（1318）年即位。元亨元（1321）年に父後宇多法皇の院政が停止され、以後親政を行う。正中元（1324）年、後醍醐の倒幕計画が発覚し、側近の日野資朝（ひのすけとも）らが処罰される（正中の変）。さらに元弘元（1331）年、再度の倒幕計画が発覚したため、京都を脱出し笠置山（かさぎやま）に立てこもるが、幕府軍に敗れた。幕府方は光厳天皇を即位させ、後醍醐は隠岐国（おきのくに＝現在の島根県隠岐諸島）に流罪（るざい）となった。

しかし、元弘3/正慶2（1333）年、後醍醐は隠岐を脱出、このころ近畿周辺で活動していた護良親王（もりよししんのう）、赤松円心（あかまつえんしん）、楠木正成（くすのきまさしげ）らの勢力に、討伐のために幕府から派遣されていた足利高氏（あしかがたかうじ）らの有力御家人も加わり、5月に六波羅探題（ろくはらたんたい）を攻略、同じころ関東でも新田義貞（にったよしさだ）が鎌倉を攻略し、鎌倉幕府は滅亡した。

帰京した後醍醐は建武の新政を始めるが、天皇専制を目指す性急な改革は社会の反発を招き、建武2（1335）年、鎌倉北条氏の残党蜂起（中先代の乱）の鎮圧のために東国へ向かった足利尊氏が、鎌倉で後醍醐から離反を明らかにしたことで崩壊した。後醍醐方は一旦は尊氏を破るが、九州へ落ち延びた尊氏方は勢力を盛り返し、建武3（1336）年5月の湊川（みなとがわ＝現在の神戸市兵庫区）の戦いに勝利し、ついで京都を占領した。後醍醐は比叡山（ひえいざん）に立てこもり抗戦するが、足利方の勤めによって三種の神器を引き渡して和議を結ぶ。足利方は、光厳上皇の院政のもと、光明天皇（こうみょうてんのう）を即位させ、尊氏は建武式目（けんむしきもく）を定めて室町幕府を開いた。

しかしその直後、後醍醐は大和国吉野（やまとのくによしの＝現在の奈良県吉野町）に脱出して朝廷を開いた。これ以後、京都の朝廷（北朝）と、吉野の朝廷（南朝）が並立しての抗争が続く。後醍醐は、皇子や重臣たちを全国各地へと送り、北朝方に対抗させた。しかし劣勢が続く中、暦応2/延元4（1339）年に病により吉野で死去した。

用語解説

【『太平記』】たいへいき

南北朝内乱を描いた軍記物。後醍醐天皇（ごだいごてんのう）による倒幕計画から始まり、幼い足利義満（あしかがよしみつ）の補佐役に細川頼之（ほそかわよりゆき）が就任するころまでを描く。

南北朝時代後半までに、室町幕府による校閲を含めて、何段階かの書き継ぎ、改訂を経て成立していったと見られている。作者は「小嶋法師（こじまほうし）」とする史料があるが、その実像についてはよくわからず、また何段階かの書き継ぎがあったとすれば複数の作者を想定する必要があるが、その他の作者についてもよくわかっていない。

【尊良親王】たかよししんのう

? 1337。後醍醐天皇の第一皇子。元弘元（1331）年に父天皇が鎌倉幕府打倒の兵を挙げると、それにしたがって笠置山に立てこもり、ついで楠木正成の河内の居城へ移った。しかし、10月に捕らえられて土佐国幡多（とさのくにはた = 現在の高知県中村市付近）へ流罪（るざい）となった。

建武の新政が始まると帰京したが、建武3（1336）年に反旗を翻した足利尊氏（あしかがたかうじ）が京都を攻め落とすと、弟の皇太子恒良親王（つねよししんのう）、新田義貞（にったよしさだ）とともに越前国（えちぜんのかくに = 現在の福井県東部）に下り、金ヶ崎城（かねがさきじょう = 現在の福井県敦賀市）に入った。しかし、翌年3月、足利方の攻撃によって金ヶ崎城は落城、両親王も自害した。

なお、名前の読みについては、「たかなが」とも読まれてきている。この点については、本用語解説の「大塔宮護良親王（おおとうのみやもりよししんのう）」の項目を参照されたい。

【『平家物語』】へいけものがたり

鎌倉時代前半に成立した軍記物語。平家の興隆と滅亡を、仏教的な無常観を底流に置きながら記した書物。著者については、天台座主慈円（てんだいざすじえん）の周辺の人物が執筆したとの説などが注目されているが、確定的な説はない。『保元物語（ほうげんものがたり）』、『平治物語（へいじものがたり）』、『承久記（じょうきゅうき）』とともに、「四部合戦状（しぶかつせんじょう）」とも称される。これらの書物は、一定の事実を示す史料や当事者の証言などをも参照しながら執筆されたと考えられている。したがって、記述の中の事実を記す部分と物語的な創作の部分との区別は、それぞれについて吟味する必要がある。

参考書籍

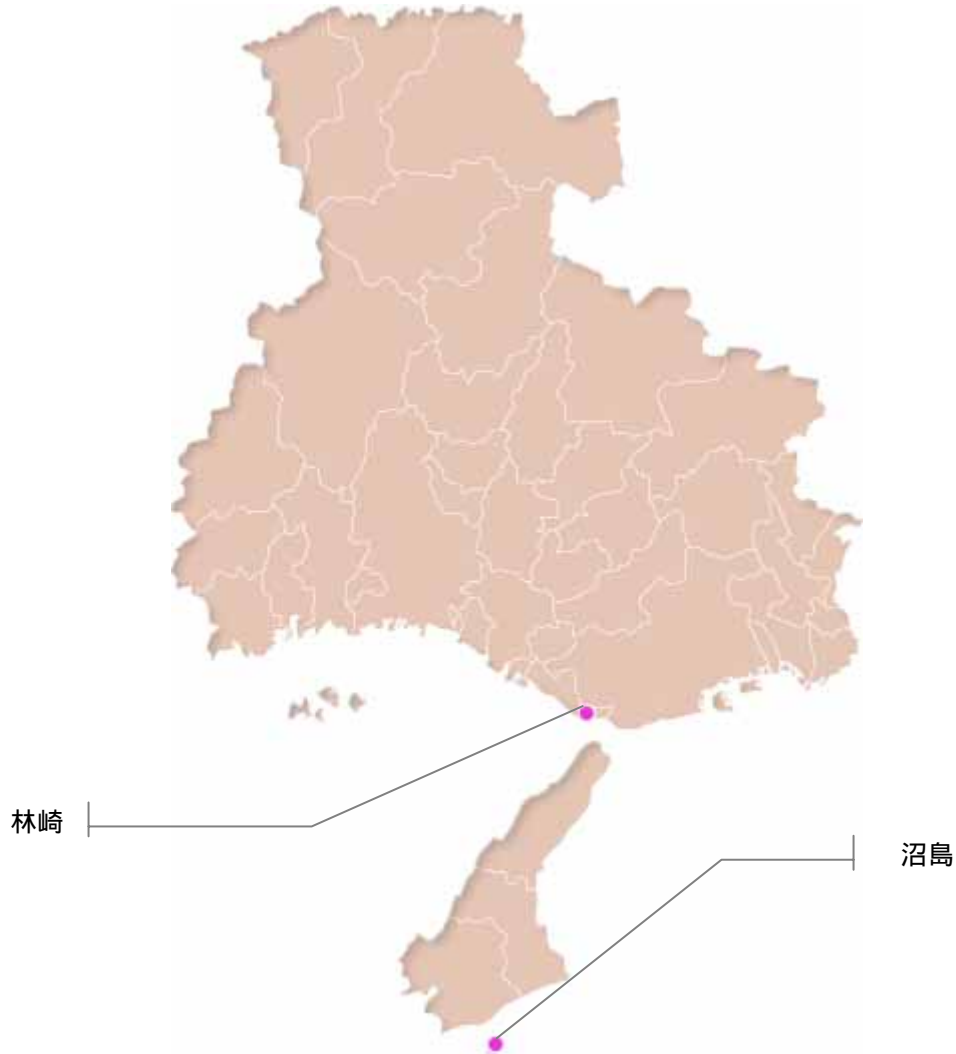
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 明石の巻	1918 (1978復刻)	編著: 藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集: 宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 東播編	1972	編集: "郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 淡路編	1972	編集: "郷土の民話"淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著: 兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
むかしばなし南淡	1981	編集: 南淡町教育委員会	南淡町教育委員会
兵庫の伝説 1	1981	編集: 有井基、絵: のざきジョー	神文書院
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集: 福田晃	みずうみ書房

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
太平記 2(日本古典文学大系35)	1961	校注: 後藤丹治、釜田喜三郎	岩波書店
播磨鑑	1958	著者: 平野庸修、校訂: 播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
淡路国名所図絵	1894 (影印版1995)	暁鐘成	臨川書店(影印版)
太平記の研究	1938 (1973復刊)	後藤丹治	河出書房(復刊: 大学堂書店)
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
沼島物語	1970	編集: 沼島壮年会	沼島壮年会
沼島 沼島地区民俗資料緊急調査報告書	1971	編集: 兵庫県教育委員会文化課	兵庫県教育委員会
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
明石の昔話	2007	八瀬久	友月書房

所在地リスト



林崎	明石市立石、林、ほか
沼島	南あわじ市沼島

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日